



新たな 50 年へ向けて 一心に木を植える

■ 白鳥 則郎

『コンピュータってそんなに強い』、『負けないで』といった励ましのメッセージをたくさんの子供たちからもいただきました」と清水市代女流王将は語った。昨年 10 月 11 日、コンピュータ将棋との対局後の懇親会でのことである。情報処理学会創立 50 周年記念事業のひとつであるコンピュータのプロ棋士への挑戦は、若者の理工系・情報系離れが進む今、身近になり忘れかけていたコンピュータの存在感を喚起し、子供たちに夢を与え育むことを目指した企画である。コンピュータ将棋の今回の勝利により早ければ 3 年後に、名人へ挑戦することを期待し願っている。

昨年 11 月 18 日の 50 周年記念式典を最後に記念の関連事業を終了し、次の 50 年の起点に立つ今、本学会はどのような方向を目指すべきなのだろうか。50 周年記念式典における C.W. ニコルさんの記念講演「心に木を植える」は、たいへん示唆に富む内容であった。講演について質問した 3 人が「とても感動した」と述べたように、我々が忘れかけていた人間としての大切なことを思い出させてくれた。そのひとつが人と森との共生である。近代化の名のもとに開発される森の木が次々に切り倒され、荒地となり放置される。魚や虫たちはいなくなり、草花も消失。ニコルさんは、1980 年代に長野県黒姫に居を定め、2002 年には財団を設立し森の再生に取り組んできたという。主な活動の中に「人と自然のバランスのとれた共生

■ 白鳥則郎
東北大学客員教授／公立はこだて未来
大学理事／情報処理学会会長

1977年東北大学博士課程修了。1990年同大工学部教授を経て1993年同電気通信研究所教授。2010年東北大学名誉教授、同大電気通信研究所客員教授。公立はこだて未来大学理事。人と情報環境の共生などの研究に従事。文部科学大臣表彰「研究部門」、IEEE フェロー、本会功績賞など受賞、2009年より本会会長。



社会の規範づくり」が掲げられている。これは、50周年記念式典において、「会長式辞」（会誌2011年2月号掲載予定）で述べた「共生」の思想に通底する考え方である。

ところで、事業仕分けで「科学技術が2番ではなぜダメなのか？」との質問が出た。政府の幹部が理解していないので、ほとんどの国民も分からないと思われる。これは、我々の説明責任が十分ではないことの証左でもある。ならば、「科学・技術で1番になり」どのような社会を目指し、そして国民の生活がどう変わるのか、我々は具体的な社会モデルを国民の前に提示すべきではないだろうか。人の個性、地域の文化、森の生態、情報システムの機能など個（人、地域、森、情報システム）の多様性を受容しつつ、個と個の調和に価値を置く考え方、すなわち共生の思想が今後ますます重要となろう。先述のニコル氏が目指す森の再生も同じ考え方である。同様に、高齢化社会と地球のために、情報システムが人や自然などの環境と調和し共生することはできないものだろうか。

21世紀の情報処理にかかわる科学技術の目指すべき方向として、情報システムが人や自然などの環境との共生へ向けたパラダイムとその基盤技術の創生が重要となろう。さらに、このようなパラダイムには、持続可能な新しい社会モデルの創生を先導することも期待できよう。この先、本学会の役割がますます大きくなるゆえんである。

